

子どもがゲンと近くなる「替え歌一本橋」

本園では降園時、玄関（靴箱前）が混み合うのを避けるために、一人一人と手遊びをして時間差をつけて送り出します。でも、降園時の手遊びの本当の意味は、単なる時間差づくりを超えたところにあります。降園時のほんの一時でも一人一人と丁寧にかかわることで、「この子は一日どんな風に過ごしたかな?」「満足して帰れるかな?」と先生がそれぞれに思いを巡らすことにつながります。或いは「ちょっとこの子のこと見ていなかったなあ・・・」と反省することにもなります。一方、子どもの方は先生とかかわって「楽しかった」と満足して笑顔で保護者の元に向かってくれるといいですね。

さて、入園後しばらくすると、子どもたちは自分の好きな物を話題にしたり、家にある物を紹介したりして、先生に少しばかり心を開いてくるようになります。降園時の手遊びもそのような機会になります。

「一本橋コチョコチョ」の手遊びは、「階段のぼって」の部分で、先生が人差し指と中指の二本指で、子どもの手の甲から首に向かって腕を登っていきます。それに対しても子どもたちは自分の要求を出してくるようになるのです。その要求に先生が即座に応えてやることで、子どもとの心の距離が縮まってくるようです。

例えば、先生が「階段のぼって」とやっている時、その子が「ウルトラマン!」と言ったとします。先生はすかさず「シュワッチ!」と言いながら、ウルトラマンになって一足飛びに首まで飛んでこちょこちょします。自分の思いが受け入れられた子どもはすっかりご満悦です。すると別の子も「仮面ライダー〇〇!（両手でバイクを運転する格好）」「〇〇プリキュア!（変身するときの言葉を言う）」「新幹線!（指を揃えてビューン!）」など、自分の好きな物になってくれと要求するのでそれに応えます。

こうやって「替え歌一本橋」を行っていくことが、子どもを受け入れることにつながり、更に信頼関係を築くことにもなります。ただし、子どもは思いもかけないものを要求してくるので、先生も柔軟に対応していく力が必要です。

（文責：星）